平成20年2月22日付 産経新聞

準備1年、古の参道に挑む

聖地巡礼

高野山町石道 上

高野山（和歌山県高野町）に歩いて登ってみたいと思っていた。平成16年7月に熊野古道を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」として、高野山への参道の1つ、高野山町石道も世界遺産に登録されたのがきっかけといえるかもしれない。

高野山には十数年前に上ったことがある。大阪・難波から南海高野線で極楽橋駅まで行き、そこから山上まではケーブルカー。山上は「まち」になっていて、観光客の移動はバスかタクシーである。日帰りの慌ただしい旅程で、高野山を開いた空海が入定している奥の院の参道沿いにあるユニークな墓ぐらいしか今では記憶も残っていない。

ケーブルカーでいくものだと思い込んでいた高野山に歩いて登る。しかも、町石道は空海が弘仁7（816）年に開創の勅許を賜り、伽藍建立に着手した当時から使われていたルート。そんな古道が残され、現役の道でもあるというのが驚きだった。

❖❖❖

高野山町石道とは、慈尊院（和歌山県九度山町）から高野山奥の院へと至る約二十数キロの道をいう。町石は1町（約109メートル）の距離を示す道しるべ。町石道では町石が卒塔婆ともなっていて、慈尊院から高野山の根本大塔までは180本、大塔から奥の院までは37本が建っている。

標高差は約770メートル。山道で上り下りもあるわけだから、実際にはそれ以上の高さを上下することになる。今回歩くにあたって参考にした『高野山を歩く』（山と渓谷社）には「早朝出発すれば1日で歩けるが、体力的にはかなりきついので2回に分けてもよい」と書かれていた。

高野山に向かうのは2月10日と決めた。今回のためというわけではないが、週1回、標高約460メートルの峠越えのハイキングをこの1年ぐらい続けてきた。早朝に出発して、夕方には宿坊に到着。疲れを癒やして翌日、歩いて下山するという計画を立てた。

❖❖❖

出発前日、関西では激しく雪が降った。自宅のある大阪近郊でもそこそこの積雪があったが、翌朝、雪はやんでいた。

大阪・難波から南海高野線で1時間余り。慈尊院の最寄り駅の九度山に着いたのは午前9時ごろだった。途中、車窓の風景が山深くなるにしたがって、雪化粧も濃くなっていた。

慈尊院は、空海の母が住まいとした寺院。高野山町石道の起点となる180町石

当時、高野山は女人禁制で、空海は月に9回（それぐらい頻繁にという数のたとえだろうが）、山を下りて母を訪ねたので九度山という地名がついたのだという。

うっすらと雪に覆われた境内には参詣者が10人ほどいた。ハイカーらしき姿の人も。石段の途上で熱心に写真を撮っている女性がいた。カメラの方向を見やると柱石が建っている。これが180町石、つまり麓側から見れば最初の町石で、（地中に埋まっている部分も含めると）高さは3・3メートルあるらしい。

ここからは町石に沿って高野山へ向かう。白く染まった道も趣があると思いながら歩を進めた。そんな楽観的な気分を忘れてしまう道のりが待っていようとは、思いもしなかった。

（青木勝洋）

＝毎週金曜掲載

うっすらと雪化粧した町石道。高野山に向かって進むにつれて雪深くなっていった＝和歌山県九度山町